幼児教育現場における運動遊びに対する保育者の意識について

Consciousness of teacher's exercise guidance might change with experience in early childhood education

大本 優希[1)]，関 耕二[1)]，岩田 昌太郎[2)]， 近藤 剛[3)]，
DAIMOTO Yuki[1)]，SEKI Koji[1)]，IWATA Shotaro[2)]，KONDO Tsuyoshi[3)]

[1)]鳥取大学 地域学部 地域学科 人間形成コース，
[2)]広島大学大学院 人間社会科学研究科，[3)]鳥取短期大学 幼児教育保育学科

キーワード：運動遊び exercise playing，運動指導 exercise guidance，
幼児教育現場 early childhood education

緒言

幼児期における運動遊びは、多様な動きの獲得に不可欠であり、幼児期以降の体力や運動能力の発達にも影響することから非常に重要であるといわれている。文部科学省により2012年に公表された幼児期運動指針[1)]では、「幼児は様々な遊びを中心に、毎日、合計60分以上、楽しく体を動かすことが大切である」と明記されているが、文部科学省の調査によると、4割を超える幼児の外遊びをする時間が一日1時間未満であるという実態が報告されており、運動量を増やすための取り組みが必要な状況であると考えられる。石沢らは、一斉活動の運動遊びでは「活発な子ども」と「不活発な子ども」は、同程度の高い活動水準が見られ、特に公園や園庭など戸外での活動ではいずれの子どもも高い活動水準を示したことを報告している[2)]。また、菊池らは、保育園で活動的な保育内容にすることによって幼児全体の運動量を増加させることができ、普段活発でない幼児ほど運動量の増加が多かったことを報告し、自由保育よりも、保育士が意図的に活動を促す保育内容の方が、普段運動量の少ない幼児ほど運動量を増加させることができると指摘している[3)]。これらのことから、幼児教育の現場において、保育士、幼稚園教諭または保育教諭(以下、本研究においては保育者と示す)が一斉指導などで主導して運動遊びの指導を行うことは、子どもの運動量や運動時間を増加させることにおいて効果的であると考えられる。

近年、子どもの体力低下が社会的な問題となっているが、宮口らは石川県における幼児の基礎運動能力を1985年と2013年を比較し、走・跳・投能力が低下していることを報告しており、特に、動作が未発達のままでいる幼児が以前に比べ多く存在していると指摘している[4)]。また、梶谷らは、1992年と2006年の幼児を対象とした体力テストの15年間の推移を調査し、4歳児女児の25m走、5歳児女児の懸垂、4歳男児の立ち幅跳び、5歳女児の立ち幅跳び及び5歳男児の立ち幅跳びにおいて低下が認められたことを報告している[5)]。このように、幼児の体力低下についての報告もみられるが、全国的に新体力テストが継続的に実施されている小学生以上における報告と比較して、幼児を対象とした調査の規模は小さく報告も少ないため、近年の幼児の体力・運動能力の現状は不明な点が多い。

子どもの体力低下の原因の1つである子どもを取り巻く環境の問題としては、文部科学省[6)]は、幼稚園においては、教員自身の外遊び体験の不足等により、幼児が遊びながら楽しく運動するような指導がうまくできないなどの状況があると指摘している。また、早川は、保育士・幼稚園教諭養成課程に属する大学生においては、幼児期に伝承遊びの経験は多いが、自然遊び及びボールを使った遊びの経験が少ないことを報告し、学生自身の経験が乏しいことが、保育・幼児教育現場で保育者となってからの自由遊びや集団遊びにおける実施頻度が少なくなっていく可能性を指摘している[7)]。さらに、日比は保育者志望学生の運動指導への自信や意識について調査し、過去にスポーツ歴のある保育者志望学生がスポーツ歴のない学生に比べて、運動遊び指導に対する自信があり、運動遊び指導に対する意識も高いことを明らかにして、子どもたちへの運動遊び指導にも影響を及ぼすことも報告している[8)]。これらのことから、保育者自身のスポーツ経験や遊びの経験によって、指導する運動遊びの内容や指導に対する意識にも違いが生じる可能性が考えられる。

幼児教育現場だけはなく小学校においても、体育専科ではない教員が体育授業を行う必要があり、実技指導を伴う体育授業に対して難しさを抱える教員が存在することが指摘されている。鬼沢らは、小学校低学年の学級担任を対象に小学校の体育授業に対する意識について調査した結果、低学年担当教員の多くは、体育の重要さは認識しているものの、指導に対する自信がないと回答したことを報告し、その原因として指導の内容・ポイントの理解不足、良い体育授業のイメージの欠如によるものだと考察している[9)]。また、宮尾らは、

小学校教師の体育授業に対する困難さを調査し、運動をするのが好き、見るのが好き、体育は大切な教科であるととらえていると体育に対して肯定的に捉えていた教師も、体育に関する研修への参加は消極的であることを明らにして、体育授業を行うことを「得意だとも苦手だとも感じていない」と回答した教師は、体育・運動に対する態度や意識が相対的に低く、体育授業において必要だとされる活動の実施状況も消極的であったことを指摘している[10]。一方、木原らは、教育実習生の体育授業に対する心配事を調査し、授業実践後は授業実践前より心配事が増大したこと明らかにしており、その理由として、教育実習の経験を通じて、学生はこれらの心配事を自己の課題として受け止めることになったこと、心配事に気付いたものの、心配を改善する機会を持てないまま教育実習を終えたことを指摘している[11]。また、嘉数らは、中学校保健体育教師に対して、勤務年数の差異による悩みを調査した結果、若手教師は中堅教師やベテラン教師と比較して授業の計画や技術指導、子どもを把握した個別指導などの悩みが高かったことから、教師としての勤務年数と体育授業に対する悩みに関連があることを報告している[12]。このように、経験が少ない教育実習生や勤務年数が短い小学校及び中学校教諭が、体育授業における児童生徒を把握することや技術指導に関する心配事や悩みを抱えながら体育授業を行っている実態があると考えられるが、小学校教諭だけではなく、実技指導を伴う運動遊び指導を行う幼児教育現場においても、保育者が運動遊び指導に対する心配事や悩みを抱えていることが予想されるが、幼児教育現場おける運動遊び指導に対する保育者の心配事については不明な点が多い。

一方、ベネッセ教育総合研究所が行った第 3 回幼児教育・保育についての基本調査は、私立・私営の園では遊びを通した総合的な活動以外に「体操」「音楽活動」「ひらがな」及び「英語」の活動も、半数以上で行っており、通常の保育時間において私立幼稚園、私営認定こども園では「体操」は 7 割以上で行われていることを報告している[13]が、幼児教育現場では運動遊び指導を外部指導者が行っているという現状がある。吉田らは、園での運動遊び指導は、外部派遣の体育講師もしくは園に所属する体育運動専門講師が行っていることがほとんどであり、その内容は、体操、水泳、サッカーなどのスポーツ種目であることを報告している[14]。また、桐川らは、幼児体育指導者採用園の約半数が、運動遊びの指導内容やカリキュラムを幼稚園と運動指導者が相談して決めておらず、保育者は指導の際には補助的な役割を行っており、指導内容や方法を指導者に任せる傾向があることを報告しており、これについて、幼稚園教諭と運動指導者とでは専門性に違いがあり、子ども観や教育観などの価値観の差も大きいと考えられ、その違いが指導に影響していることも考察している[15]。ところで、このような傾向は運動遊び指導だけではなく英語活動でも同様であり、指導や活動内容の決定を講師や外部講師（外国人講師や業者）に委ねていることについて、英語活動に対する知識や情報量の不足が原因ではないかと推測し、英語活動を日々の活動の一部として位置付けていないことの表れであると指摘されている[16、17]。

以上のことから、幼児教育現場においても、健康・体力づくりに対する関心は高まり、体力を向上させるための運動遊びは行われているが、保育者の運動遊びに対する意識やその実態については不明な点が多い。

そこで、本研究では、幼児教育現場における運動遊びに対する保育者の意識と指導の実態を明らかにすることを目的とした。

研究方法

本研究では、鳥取県内の幼稚園・保育園・認定こども園(以下 : 幼児教育現場)に勤務する保育者に、運動遊びの指導に対する心配事、運動遊び指導の詳細について明らかにするためにアンケートを実施した。尚、アンケート配布に際し、保育者及び幼稚園・保育園・認定こども園の責任者に対して、書面及び口頭で研究の趣旨や結果の公表方法等について説明し、アンケートの回答をもって研究参加に同意の意思を示したこととした。

アンケートは 2022 年 11 月に配布し、12 月中に回収した。得られたアンケートは 87 名分であったが、質問項目に関して回答が得られなかった等の欠損データを除いた 79 名の保育者を分析対象とした。

1.保育者の属性について

回答する保育者の属性を調査するため、「性別」「保育園・幼稚園での勤務年数」「現在勤務している園」「所有している資格・免許」「運動・スポーツのライセンス(指導者資格、審判資格)」について記載を求めた。

2.運動遊び指導に対する心配事について

運動遊び指導に対する心配事の質問は、木原ら[11]が作成した運動指導に対する心配事についての 17 項目の質問を保育者用に修正して設定した(**表 1**)。17 項目の質問は、「指導法」

表 1　運動遊び指導に対する心配事の分類

指導法	子どもが安全に運動できる　（安全）
	どの運動を教えるべきか理解している　（運動理解）
	自分が模範を示せない種目の運動を教える　（模範）
	子どもの行動をコントロールできる　（統制）
	運動用具の準備や施設の管理ができる　（施設管理）
	各種目に必要な運動技能を指導できる　（技術指導）
	運動技能を向上させる指導ができる　（技能向上）
子どもへの配慮	運動の苦手な子どもへの配慮ができる　（不得意）
	一人一人の子どもを把握できる　（把握）
	子どもたちの運動のつまづきを診断できる　（つまづき）
	子ども同士の協力的な関係をつくる　（協力関係）
	いろいろな子どもたちのニーズに合わせる　（ニーズ）
保育者としての資質について	子どもが自分の指導を好意的に評価してくれる　（好意）
	今の自分では子どもたちに悪い影響を与えてしまう　（悪影響）
	他の保育者に認められ受け入れられる　（受け入れ）
	他の保育者の前でうまく行動する　（振る舞い）
行事へのかかわりについて	園で運動にかかわる行事予定を理解している　（行事予定）

木原ら[11]が作成した運動指導に対する心配事についての 17 項目の質問を保育者用に修正した

「子どもへの配慮」「保育者としての資質について」「行事へのかかわりについて」の４つの分類に構成されている。これらの 17 項目の質問に対して、「全く心配していない」を 1、「心配していない」を 2、「どちらでもない」を 3、「心配している」を 4、「とても心配している」を 5 として、5 件法で回答させた。

3.運動遊び指導の実態について

本研究で対象となった保育者 79 名のうち、保育者の勤務する幼児教育現場において外部指導者が運動遊び指導を行っていると回答した保育者が 69 名であった。しかし、外部指導者の運動遊びの指導内容について詳細な回答が得られなかった保育者が 28 名存在した。したがって、運動遊びの指導については、41 名を分析対象とした。

運動遊びの指導についての質問項目は、運動遊び指導の内容、運動遊び指導の頻度、運動遊び指導を外部指導者が担当する理由、外部指導者が指導する際の保育者の役割、外部指導者との打ち合わせ回数、外部指導者から学んだこと、運動遊び指導に対する意識についてであった。

尚、運動遊び指導の内容、運動遊び指導の頻度、運動遊び指導を外部指導者が担当する理由を自由記述で回答させた。また、外部指導者が指導する際の保育者の役割は「主たる指導者」「外部指導者の補助」「監督者」「その他」で回答させた。さらに、外部指導者との打ち合わせ回数は「活動毎」「週に一回」「月に一回」「行わない」「その他」で回答させた。加えて、外部指導者から学んだことについての質問は「指導法」「子どもへの配慮」「保育者としての資質」「行事とのかかわりについて」で回答させた。一方、運動遊び指導に対する意識についての質問は、伊藤ら[16]が作成した英語活動を行う際の保育者の意識調査の項目を運動遊び指導用に修正し作成した。「担当保育者が主として運動遊び指導を担当することについてどう考えますか」という質問については、「対応すべき」「対応できるならよい」「どちらともいえない」「対応しない方がよい」で回答させた。「あなたは主として運動遊び指導を担当したいと思いますか」及び「これからも運動遊び指導は外部指導者に行ってほしいと思いますか」については、「強く思う」「思う」「少し思う」「思わない」で回答させた。

4.統計方法

本研究では、勤務年数において対象者を A 群(1～5 年)、B 群(6～10 年)、C 群(11～15 年)、D 群(16～20 年)、E 群(21 年以上)として群分けした。また、所有する資格・免許については、対象者を a 群(幼稚園教諭免許と保育士資格を併せ有する保育者)、b 群(保育士資格のみ所有する保育者)、c 群(幼稚園教諭免許、保育士資格、小学校教諭免許を併せ有する保育者)に群分けした。その後、運動遊び指導に対する心配事と「勤務年数」及び「所有する資格・免許」「外部指導者の有無」とのそれぞれの関係をこれらの群から比較検討するために、一要因分散分析を行い、有意な主効果が認められた場合には多重比較検定を行った。さらに、「あなたの勤務する園では外部指導者を招いて運動遊び指導を行っていますか」という質問に対して、「はい」と回答した保育者を「外部指導者有群」、「いいえ」と回答した保育者を「外部指導者無群」に群分けした。その後、運動遊び指導に対する心配事と「外部指導者の有無」の関係を明らかにするために、Mann-Whitney の U 検定を実施した。

尚、本研究の統計解析は IBM SPSS Statistics 27 を用い、有意水準は 5%未満とした。

結果と考察

1.対象とした保育者の属性

本研究で対象となった保育者は、男性 4 名、女性 75 名であった。幼稚園教諭免許状、保育者資格を併せて所有している保育者は、51 名、保育士資格のみ所有している保育者は、12 名、幼稚園教諭免許状、保育士資格、小学校教諭免許状を併せて所有している保育者は 7 名であった。また、運動・スポーツのライセンス(指導者資格、審判資格など)を所有している保育者に対しての質問に対して、1 名の保育者が幼児体育初級公認指導員資格を所有していると回答した。

本研究で対象となった保育者の勤務年数は、1～15 年が 15 人、6～10 年が 14 人、11～15 年が 7 人、16～20 年が 15 人、21 年以上が 28 人であり、21 年以上の保育者が最も多く、11～15 年の保育者が最も少なかった。

2.運動遊び指導に対する心配事

対象者全体の運動遊び指導に対する心配事の各項目の比率を、**図 1** に示した。

「子どもが安全に運動できる(安全)」の項目は、53.2%の保育者が「とても心配している」もしくは「心配している」と回答したが、内閣府は、令和 3 年の教育・保育施設等における事故件数について、報告件数は 2,347 件であり、前年と比べて 332 件増加していることを報告している[18]。また、中道は、幼児の障害事故の発生時の活動状況を調査し、幼稚園・保育園における障害事故は、粗大運動を伴う遊び・活動中に起こったことを指摘している[19]。これらのことから、保育者は運動遊びには危険が伴うものであると感じ、安全に運動遊びを行うことに対して心配事を抱えることにつながっている可能性が考えられる。さらに、日比は、過去にスポーツ歴のある保育者志望学生がスポーツ歴のない学生に比べて、運動遊び指導に対する自信があり、そのことが子どもたちへの運動遊び指導にも影響を及ぼすことも指摘していることから[8]、自分が模範を示せない種目は自分がこれまでにしたことのない種目と考えられ、保育者自身のスポーツ経験が運動遊び指導に対する心配事に影響を与える可能性も考えられる。

一方、「とても心配している」及び「心配している」を合わせた運動遊び指導に対する心配事がある人数の割合で各項目をみると、「指導法」に分類される「運動用具の準備や施

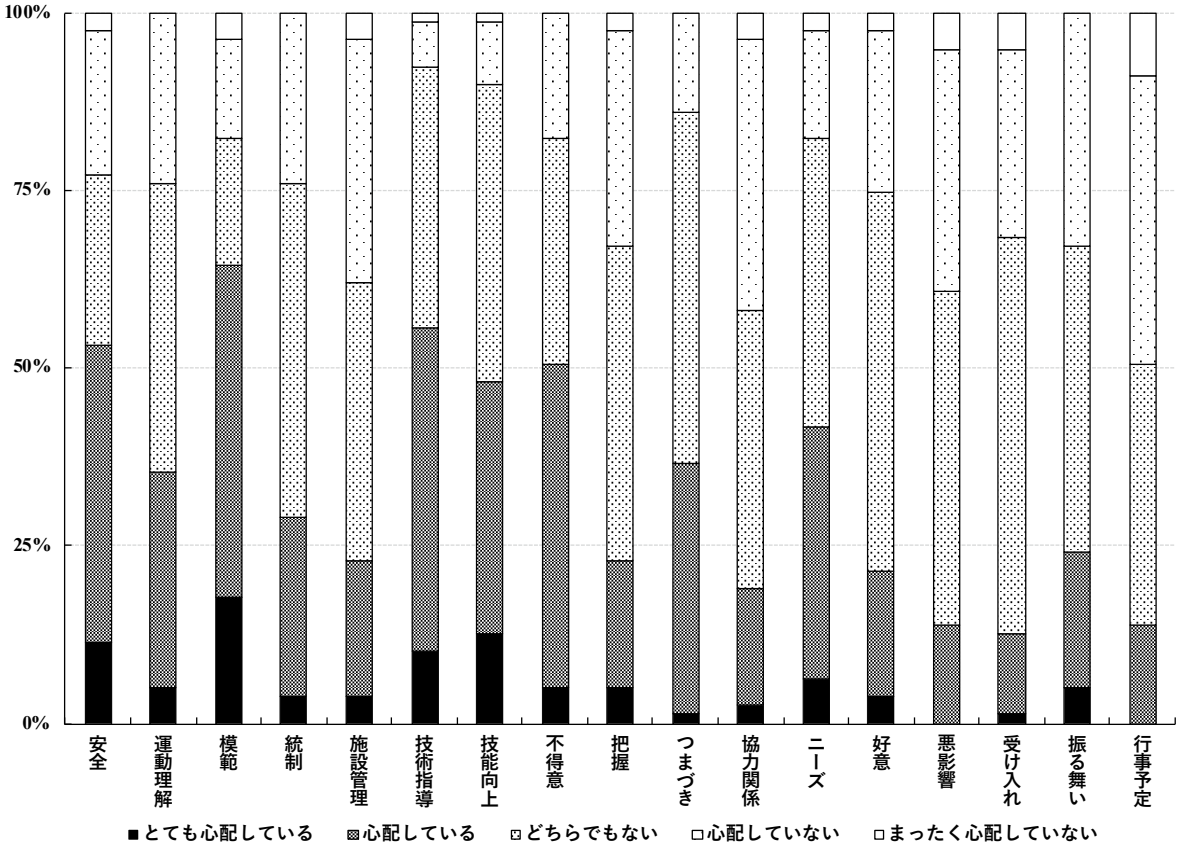

図１　運動遊び指導に対する心配事の比率

n=79

設の管理ができる(施設管理)」の項目は 25%以下であった。また、「子どもへの配慮」に分類される「一人一人の子どもを把握できる(把握)」「子ども同士の協力的な関係をつくる(協力関係)」、「保育者としての資質について」に分類される「子どもが自分の指導を好意的に評価してくれる(好意)」「今の自分では子どもたちに悪い影響を与えてしまう(悪影響)」「他の保育者に認められ受け入れられる(受け入れ)」「他の保育者の前でうまく行動する(振る舞い)」及び「行事へのかかわりについて」に分類される「園で運動にかかわる行事予定を理解している(行事予定)」の項目においても、25%以下という低い結果であった。

加登本らの小学校教諭を対象とした体育授業に関する悩み事についての研究[20]においても、運動用具の準備や施設の管理に関する項目は、本研究と同様に低い割合を示しており、保育者の中でも、管理する役割をもっていない保育者は心配事として自覚しにくいものであると考えられる。

また、「各種目に必要な運動技能を指導できる(技術指導)」の項目においても、50%を超える保育者が「とても心配している」もしくは「心配している」と回答したが、「保育者としての資質について」に分類される全ての項目においては、「とても心配している」もしくは「心配している」と回答した保育者は 25%に満たなかった。

このように、今回対象となった保育者は、運動遊び指導に対して、特に、「指導法」に分類される心配事を抱えている保育者が多いが、「保育者としての資質について」に分類される心配事を抱えている保育者は少ないことが明らかになった。したがって、運動遊びの指導は、保育者にとって保育者の資質のなかで重要視されていない可能性が考えられる。

さらに、「いろいろな子どもたちのニーズに合わせる(ニーズ)」の項目は、41%の保育者が「とても心配している」もしくは「心配している」と回答し、6 番目に高い割合を示した。加登本らの研究では、ニーズに関する項目が 55.1%で全項目の中でも一番高い割合であったことが報告されている[20]。厚生労働省による「多様なニーズを抱えた保護者・子どもへの支援」[21]によれば、一時預かり事業、障害児、外国籍の子ども、家庭環境に特別な配慮が必要な子どもなど、保育の現場で保育のニーズが多様化している現状が報告されており、多様化する保育者の業務の中で、保育者がそのような子どもたちの一人一人を把握することにおいて保育者の負担が増加していることが考えられる。これらのことが結果として、子どもたちのニーズに合わせた指導を行うことに心配事を抱えることにつながっている可能性が考えられる。

表 2　運動遊び指導に対する心配事と勤務年数との関係

分類	項目	勤務年数 A群 1～5年 (n=15)	B群 6～10年 (n=14)	C群 11～15年 (n=7)	D群 16～20年 (n=15)	E群 21年～ (n=28)	
指導法	子どもが安全に運動できる	3.93±0.80	3.21±0.97	3.57±1.27	3.40±0.99	3.14±1.04	
	どの運動をを教えるべきか理解している	3.60±0.91	3.50±0.52	3.43±0.79	2.87±0.83	2.86±0.85	
	自分が模範を示せない種目の運動を教える	3.93±1.16	3.86±0.95	3.71±0.76	3.47±1.25	3.36±0.99	
	子どもの行動をコントロールできる	3.47±1.06	3.14±0.66	2.86±0.38	3.07±0.80	2.93±0.77	
	運動用具の準備や施設の管理ができる	3.07±1.10	3.21±0.80	2.57±0.53	2.67±0.98	2.71±0.85	
	各種目に必要な運動技能を指導できる	3.60±1.06	4.00±0.78	3.57±0.53	3.60±0.74	3.32±0.72	
	運動技能を向上させる指導ができる	3.40±1.06	4.07±0.83	3.14±0.69	3.47±0.74	3.36±0.83	
子どもへの配慮	運動の苦手な子どもへの配慮ができる	3.80±0.68	3.50±0.76	3.86±0.38	3.27±0.96	3.04±0.84	*A＞E
	一人一人の子どもを把握できる	3.40±1.12	3.29±0.61	2.43±0.53	2.87±0.74	2.64±0.87	
	子どもの運動のつまづきを診断する	3,53±0.52	3.43±0.65	2.86±0.69	3.33±0.72	3.04±0.74	
	子ども同士の協力的な関係をつくる	3.00±1.13	2.71±0.99	3.00±0.82	2.80±0.68	2.57±0.74	
	いろいろな子どもたちのニーズに合わせる	3.60±1.12	3.36±0.93	3.00±0.82	3.33±0.72	3.11±0.83	
保育者としての資質について	子どもが自分の指導を好意的に評価してくれる	3,47±0.92	314±0.77	3.14±0.90	2.53±0.74	2.82±0.67	*A＞D
	今の自分では子どもたちに悪い影響を与えてしまう	2.73±0.80	2.79±0.70	2.57±0.98	2.67±0.82	2.68±0.77	
	他の保育者に認められ受け入れられる	3.20±1.01	2.57±0.85	2.71±0.76	2.80±0.56	2.64±0.62	
	他の保育者の前でうまく行動する	3.27±1.10	3.14±0.77	2.57±0.79	3.00±0.85	2.79±0.74	
行事へのかかわりについて	園で運動にかかわる行事予定を理解している	3.13±0.99	2.57±0.65	2.57±0.53	2.27±0.88	2.39±0.79	*A＞D

17 の項目について「全く心配していない」を 1、「心配していない」を 2、「どちらでもない」を 3、「心配している」を 4、「とても心配している」を 5 として 5 段階で回答した。　　値：平均値±標準偏差，　n=79，＊：p<0.05

3.運動遊び指導に対する心配事と勤務年数との関係について

本研究の対象者を勤務年数により、1～5 年を A 群(15 名)、6～10 年を B 群(14 名)、11～15 年を C 群(7 名)、16～20 年を D 群(15 名)、21 年以上を E 群(28 名)の 5 群に分類して、運動遊び指導に対する心配事と勤務年数との関係を**表 2** に示した。

「運動の苦手な子どもへの配慮ができる(不得意)」の項目において、E 群の 3.04±0.84 と比較して、A 群の 3.80±0.68（平均値±標準偏差）の方が有意に高かった($p<0.05$)。また、「子どもが自分の指導を好意的に評価してくれる(好意)」の項目において、D 群の 2.53±0.74 と比較して A 群の 3.47±0.92 の方が有意に高かった($p<0.05$)。さらに、運動遊び指導に対する心配事と勤務年数の関係においては、明らかな違いは認められなかったものの 17 項目中、16 項目において勤務年数が 10 年未満の保育者がそれ以上の保育者より心配が高い傾向であった。したがって、勤務年数が短い保育者は、運動の苦手な子どもを把握し、その子どもにあわせた運動遊び指導を行うことに心配事を抱えている可能性が考えられた。また、勤務年数が短い保育者は、保育者自身が行う指導に対して、子どもがどのような反応を示すのかに心配事を抱えていると考えられる。

嘉数らは、中学校保健体育教師に対して、教職歴の差異による悩みを調査し、若手教師が中堅教師やベテラン教師と比較し、授業の計画や技術指導、子どもを把握して個別指導を行うことなどに関して、悩みが高かったことを報告した [12]。また、鬼澤らは、小学校教員のうち、若手教員が「運動指導・体育授業に関する理解」が他の教職歴の教員に比べて低い傾向を示し、「指導資料を活用している」ことについても中堅教員に比べ低かったことを報告し、若手教員は運動指導に不安を抱えているものの、体育授業に関する情報を得ようとしていないことを指摘している [9]。これらのことから、本研究で対象となった勤務年数が短い保育者においても、運動の苦手な子どもを把握した上で子どもに合わせた指導法の充実及び改善に向けて十分に取り組めていないことが予想される。また、子どもが自身の指導を好意的に評価してくれるか心配に思っているものの、指導力を向上させることについて学びの機会が十分ではないことが考えられる。

一方、「行事へのかかわりについて」に分類される「園で運動にかかわる行事予定を理解している(行事予定)」の項目については、D 群の 2.27±0.88 と比較して、A 群の 3.13±0.99 の方が有意に高かった($p<0.05$)。したがって、勤務年数が短い保育者は、幼児教育現場において運動会などの運動にかかわる行事と毎日の運動遊びとの関係についての理解が不足していることが心配事につながっていることが明らかになった。このことは、勤務年数の長い保育者は勤務年数が短い保育者と比較し、毎年行われる行事予定の経験回数が多いため心配事が低かったが、勤務年数の短い人ほど行事予定の経験回数が少ないため、運動遊び指導に対する心配事が大きくなる可能性が考えられる。

4. 運動遊び指導に対する心配事と所有する資格・免許との関係について

本研究の対象者を幼稚園教諭免許と保育士資格を併せ有する保育者を a 群(51 名)、保育士資格のみ所有する保育者を b 群(12 名)、幼稚園教諭免許、保育士資格及び小学校教諭免許を併せ有する保育者を c 群(7)の 3 群に分類して、運動遊び

表 3　運動遊び指導に対する心配事と資格・免許との関係

分類	項目	所有している資格・免許			
		a群 幼＋保 (n=51)	b群 保のみ (n=12)	c群 幼＋保＋小 (n=7)	
指導法	子どもが安全に運動できる	3.43±0.98	3.25±10.6	3.71±1.38	
	どの運動をを教えるべきか理解している	2.94±0.81	3.42±0.79	3.43±0.98	
	自分が模範を示せない種目の運動を教える	3.41±1.06	3.92±1.00	3.71±1.25	
	子どもの行動をコントロールできる	3.02±0.79	3.33±0.89	3.00±1.00	
	運動用具の準備や施設の管理ができる	2.71±0.81	3.17±1.03	2.86±1.21	
	各種目に必要な運動技能を指導できる	3.37±0.82	3.75±0.62	4.14±0.69	
	運動技能を向上させる指導ができる	3.25±0.82	4.00±0.60	3.71±1.11	*a群＜b群
子どもへの配慮	運動の苦手な子どもへの配慮ができる	3.24±0.81	3.58±0.79	3.86±0.38	
	一人一人の子どもを把握できる	3.02±0.81	3.42±0.79	3.29±1.38	
	子どもの運動のつまづきを診断する	3.20±0.69	3.17±0.58	3.57±0.79	
	子ども同士の協力的な関係をつくる	2.65±0.74	3.00±1.04	3.14±1.35	
	いろいろな子どもたちのニーズに合わせる	3.12±0.79	3.75±0.75	3.43±1.13	
保育者としての資質について	子どもが自分の指導を好意的に評価してくれる	2.82±0.77	3.17±0.58	3.14±0.90	
	今の自分では子どもたちに悪い影響を与えてしまう	2.65±0.80	2.83±0.72	2.57±0.79	
	他の保育者に認められ受け入れられる	2.71±0.73	2.83±0.72	3.14±1.07	
	他の保育者の前でうまく行動する	2.82±0.77	3.25±0.75	3.29±1.38	
行事へのかかわりについて	園で運動にかかわる行事予定を理解している	2.37±0.80	3.08±0.79	2.86±0.90	*a群＜b群

17 の項目について「全く心配していない」を 1、「心配していない」を 2、「どちらでもない」を 3、「心配している」を 4、「とても心配している」を 5 として 5 段階で回答した。　　値：平均値±標準偏差,　n=70, ＊：p<0.05

指導に対する心配事と所有する資格・免許との関係を**表 3** に示した。

「運動技能を向上させる指導ができる(技能向上)」の項目において、a 群の 3.25±0.82 と比較して、b 群の 4.00±0.60 の方が有意に高かった(p＜0.05)。また、「園で運動にかかわる行事予定を理解している(行事予定)」の項目において、a 群の 2.37±0.80 と比較して、b 群の 3.08±0.79 の方が有意に高かった(p＜0.05)。一方で、c 群と a 群及び c 群と b 群との間に明らかな違いは認められなかった。

これらのことから、保育士資格のみを所有している保育者は、「運動技能を向上させる指導ができる(技能向上)」及び「園で運動にかかわる行事予定を理解している(行事予定)」の心配事を多く抱えていることが明らかになったことより、保育士資格だけでなく、幼稚園教諭免許と合わせて所有している方が、心配事を減少することが示唆された。また、小学校教諭免許を所有しているからといって、他の保育者より運動遊びの指導に対する心配事を軽減するものではない可能性が考えられる。

5.外部指導者が行う運動遊び指導の実態

本研究で対象となった保育者のうち、外部指導者有群に分類された保育者は 63 名であった。そのうち運動遊び指導の実態に関する詳細な回答が得られた保育者は41 名であった。

運動遊び指導の際に外部指導者が行っている運動遊びの内容を質問した結果、サッカーやドッヂボールを含む「ボール遊び」と回答した保育者が 22 人と最も多く、次に「鉄棒」が 20 人、「跳び箱」が 19 人、「縄跳び（大縄、短縄を含む）」が 19 人、「マット運動」が 16 人の順に多く実施されており、特に道具を使った運動遊びが多い傾向であった。

吉田らは、幼稚園での運動遊び指導の内容について、マット・鉄棒・跳び箱は 52.9%を占めており、ボール遊びにおいては 1.8%であったと報告し [22]、杉原らは、幼稚園で指導されている内容について、体操・リズム体操が 63.2%、ボール遊びは 14.0%であったと報告しており [23]、本研究とは異なる結果であったが、器具や道具を活用した運動遊びという点は共通していた。また、大矢らは、小学校教師の投運動指導の実態を調査し、運動領域のうち、特に「ボール運動系」の苦手意識が女性教師の方が高かったことを報告している [24]。一般的に、幼児教育現場では女性保育者が多いことから、多くの女性保育者がボール遊びに関する運動遊び指導に対して苦手意識をもっており、外部指導者が主として指導を行っている可能性も推察される。

外部指導者による運動遊び指導の頻度を質問した結果、最も多かった回答は「月に 1 回」が 19 人であり、次いで「2~3 ヶ月に 1 回」が 8 人、「年に 1 回」が 5 人、「月に 1~2 回」と「週に 1 回」が 3 人であり、幼児教育現場における運動遊び指導の実施には、園によって大きな差が生じていることが明らかになった。「週に 1 回」と回答した保育者の勤務する園においては、他の園と比較し、運動遊びが幼児にとって日常の一部になっていることが考えられる。また、以前は行っ

ていたが、現在は新型コロナウイルス感染症の影響により、指導を見合わせたり、なくなったりしていると回答した保育者もいた。

また、外部指導者による運動遊び指導を「外部指導者が担当する理由」を質問した結果、最も多かった回答は「保育者の指導力の向上のため」の 11 人であり、次に「子どもの運動能力の向上のため」が 9 人、「専門的な指導を行うため」が 6 人、「保育者では難しい指導があるため」が 4 人、「担任以外の人とのかかわりをもつため」が３人、「子どもの運動能力を評価することができるため」が２人という回答が続いた。その他の回答には、「安全に楽しく運動遊びを楽しむため」、「子どもの発達にあった指導を行うため」、「法人の関係者」などの回答があった。

さらに、外部指導者との打ち合わせ回数を質問した結果、最も多かった回答は「活動毎に行っている」の 26 人(63%)であり、次いで「行わない」の 9 人(22%)、その他「月に１回」が 5 人であり、外部指導者と打ち合わせをすることとないまま、運動遊びの指導が行われている実態が少なからず存在することが明らかになった。

加えて、外部指導の際の保育者の役割について質問した結果、41 人中 40 人の保育者が「外部指導者の補助」と回答した。その他と回答した保育者は、「安全管理」と回答した。

桐川らは、外部指導者による運動遊び指導の際、保育者の約 50%が事前打ち合わせを行わないことを報告している [15]。一方、英語活動の外部講師との関わりについて伊藤らは、幼児の英語活動の際、打ち合わせについては保育者の 62%が事前打ち合わせを行わないこと、保育者の役割については 76.3%の保育者が講師の補助を行っていることを報告しており、外部講師との打ち合わせの実施率の低さからも指導の補助とは考えにくいと指摘している [16]。これらのことから、本研究の対象となった保育者の回答は、先行研究と比較して事前打ち合わせを「行わない」と回答した保育者は少ない傾向であったものの、外部指導者による運動遊びの際、保育者の多くが補助的な役割を行っているため、打ち合わせについて優先順位は高くない可能性が考えられる。また、伊藤らは、保育者の多くは、外部講師が英語活動を実施するにあたって使用する道具の準備や、幼児が参加しやすい環境づくりなどが主な役割になっていると考えられると指摘していることから [16]、本研究で対象となった保育者も、自らが主として運動遊び指導する立場ではなく、園児が参加できる環境づくりなど、外部指導者による運動遊び指導を円滑に進めるための役割を積極的に担っていると考えられる。

一方、「保育者が外部指導者から学んだこと」について質問した結果、複数回答があり「指導法」と回答した保育者が 38 人と最も多く、次いで「子どもへの配慮」が 10 人、「保育者としての資質」が２人であり、「行事とのかかわりについて」と回答した保育者はいなかった。

以上のことより、本研究の保育者における運動遊び指導の実態については、頻度に差はあるが定期的に外部指導者による指導が多く実施されていることが明らかになった。一方で、外部指導者との打ち合わせを行わずに運動遊び指導を行っている保育者が存在することや、保育者が主として運動遊び指導を行うのではなく補助的な役割に徹している現状が明らかになった。

表 4　運動遊び指導に対する心配事と外部指導者の有無との関係

分類	項目	外部指導者有群 (n=63)	外部指導者無群 (n=16)	
指導法	子どもが安全に運動できる	3.46±1.04	3.13±0.89	
	どの運動をを教えるべきか理解している	3.11±0.88	3.38±0.72	
	自分が模範を示せない種目の運動を教える	3.62±1.13	3.56±0.73	
	子どもの行動をコントロールできる	3.13±0.81	2.94±0.77	
	運動用具の準備や施設の管理ができる	2.78±0.91	3.13±0.89	
	各種目に必要な運動技能を指導できる	3,57±0.84	3.56±0.73	
	運動技能を向上させる指導ができる	3.51±0.90	3.44±0.81	
子どもへの配慮	運動の苦手な子どもへの配慮ができる	3.49±0.82	2.94±0.77	*有＞無
	一人一人の子どもを把握できる	2.98±0.89	2.69±0.87	
	子どもの運動のつまづきを診断する	3.27±0.65	3.13±0.89	
	子ども同士の協力的な関係をつくる	2.81±0.88	2.56±0.81	
	いろいろな子どもたちのニーズに合わせる	3.35±0.86	3.00±0.97	
保育者としての資質について	子どもが自分の指導を好意的に評価してくれる	2.98±0.85	2.94±0.68	
	今の自分では子どもたちに悪い影響を与えてしまう	2.67±0.82	2.81±0.54	
	他の保育者に認められ受け入れられる	2.83±0.71	2.56±0.96	
	他の保育者の前でうまく行動する	2.97±0.90	2.94±0.68	
行事へのかかわりについて	園で運動にかかわる行事予定を理解している	2.48±0.82	2.88±0.89	

17 の項目について「全く心配していない」を 1、「心配していない」を 2、「どちらでもない」を 3、「心配している」を 4、「とても心配している」を 5 として 5 段階で回答した。

値：平均値±標準偏差,　n=79, ＊：p<0.05

6.運動遊び指導に対する保育者の意識

本研究で対象となった保育者は、運動遊び指導に対する意識についての質問に対して、すべてに回答した訳でではなかったので、回答が得られた人数で検討を行った。

「担任保育者が主として運動遊び指導を担当すること」についてと質問した結果、「対応できるならよい」と回答した保育者が 26 人（63%）と最も多く、次いで「対応すべき」が 8 名、「どちらともいない」が 7 名であった。また、「あなたは主として運動遊び指導を担当したいと思うか」について質問した結果、担当したいと「思わない」が 20 人（48.8%）と最も多く、次いで「思う」が 15 人、「少し思う」が 5 人、「強く思う」が 1 名であり、担当したいと「思わない」という消極的な意識と「思う」と「少し思う」含めた積極的な回答と同程度であった。さらに、「これからも外部指導者に指導してほしいか」について質問した結果、「強く思う」が 20 人、「思う」が 19 人、「少し思う」が 2 名であり、回答した保育者の 95%がこれからも外部指導者に行ってほしいと回答した。これらのことから、本研究で対象となった保育者の多くが、主として運動遊び指導を行うことに対して消極的な態度を示していることが明らかになった。

さらに、外部指導者が指導を担当する理由を「保育者の指導力向上のため」と回答した 11 名の保育者の運動遊び指導に対する意識を検討した結果、「主として運動遊びを担当したい」という質問した回答では、「思う」が 3 名、「少し思う」が 2 名であったが、「思わない」が 6 名であった。また、「これからも運動遊び指導を外部指導者に行ってほしい」という質問した回答では、「強く思う」が 5 名、「思う」が 6 名であった。したがって、「指導方法を学びたい」と考えていながらも、自らは主として運動遊び指導を担当せず、外部指導者に任せたいと考えている保育者が多くいることが明らかになった。

これまでの検討で、本研究における外部指導者が行う運動遊び指導は、保育者の指導力の向上のため、頻度に差はあるものの様々な内容の指導を実施していることが明らかになり、運動遊び指導に対する意識も多様であることが明らかになったことから、運動遊び指導に対する心配事と外部指導者の有無について分析を実施した。分析対象者を、運動遊び指導の際に外部指導者を招いている群を外部指導者有群(63 人)、招いていない群を外部指導者無群(16 人)に分類し比較した結果を**表 4** に示した。

「指導法」や「保育者としての資質について」及び「行事へのかかわりについて」に分類される項目では明らかな違いは認められなかったが、「子どもへの配慮」に分類される「運動の苦手な子どもへの配慮ができる（不得意）」の項目においてのみ、外部指導者有群の 3.49±0.82 の方が、外部指導者無群の 2.97±0.77 と比較して有意に高かった($p<0.05$)。これらの結果は、保育者の運動遊び指導に対する心配事は、外部指導者による実践の経験が身近に有することは、あまり影響を受けていないと考えられる。しかし、子どもへの配慮のなかでも特に、運動の苦手な（不得意）な子どもへの配慮について、外部指導者の実践を身近でみている保育者には、外部指導者の専門的な指導が唯一の正解であるように受け取られて、自己の指導との違いが明確になることで、指導に対する自信の向上につながっていないと推察される。これらのことから、外部指導者を招いていることが運動遊び指導に対する心配事の減少につながっているわけではなく、外部指導者を招いている園で勤務する保育者も運動遊び指導に対する心配事を抱えているということが明らかになった。

結語

本研究では、幼児教育現場における運動遊びに対する保育者の意識と指導の実態を明らかにすることを目的として、検討を行った結果、以下のことが明らかとなった。

1.保育者の運動遊び指導に対する心配事は、「運動の苦手な子どもへの配慮(不得意)」、「子どもが自分の指導を好意的に評価してくれる(好意)」及び「園で運動にかかわる行事予定を理解している(行事予定)」の項目で、勤務年数が長い方が有意に低くなった。

2.保育士資格のみを所有している保育者の運動遊び指導に対する心配事は、幼稚園教諭、保育士資格を併せ有している保育者と比較して「運動技能を向上させる指導ができる(技能向上)」及び「園で運動にかかわる行事予定を理解している(行事予定)」の項目において、有意に高くなった。

3.運動遊び指導を外部指導者が担当する理由としては、「保育者の指導力の向上のため」と考えている保育者が多い傾向にあった。

4.外部指導者との打ち合わせについては、約 6 割の保育者が「活動毎に行う」と回答しているが、約 2 割の保育者は打ち合わせを行うことなく指導を行っている傾向にあった。

5. 本研究で対象となった保育者の多くが、自身が主として運動遊び指導を行うことに対して消極的な態度を示す傾向にあった。

6.外部指導者有群に分類された保育者は、「運動の苦手な子どもへの配慮ができる(不得意)」の項目における心配事が、外部指導者無群よりも有意に高くなった。

以上のことから、経験がより少ない保育者ほど運動遊びの指導に対する心配事を抱えていることが明らかになった。また、保育者の多くが外部指導者の補助的な役割に徹しており、自身が主として運動遊び指導を行うことに対して否定的な意識を示していることが明らかになった。

今後は、保育者にとって、運動遊び指導に対する心配事の軽減につながるような研修やプログラムの開発など、外部指導者等の指導方法も含めた検討が課題である。

謝辞

本研究の成果の一部は、JSPS 科研費 JP20K2887 の助成を受けたものです。また、本研究の実施にあたり、ご協力いただいた保育者の皆様に感謝申し上げます。

主な引用・参考文献

1) 文部科学省,幼児期運動指針,2012
2)石沢順子・佐々木玲子・松嵜洋子・吉武裕, 保育中の活動場面による身体活動水準の違い-活発な子どもと不活発な子どもの比較-, 発育発達研究, 62, 1-11, 2014.
3) 菊池透・山崎恒・亀田一博・樋浦誠・仁科正裕・内山聖, 保育所における保育士の働きかけと運動量との関連, 小児保健研究, 61(3), 470-474, 2002.
4) 宮口和義・出村慎一, 石川県における幼児の体格・基礎運動能力についての考察 : 1985 年と 2013 年との比較,発育発達研究, 73, 20-28, 2016.
5) 梶谷信之・小合幾子・梶谷みどり・渡部昌史・加賀勝, 附属幼稚園児の体力・運動能力-15 年間の推移-, 岡山大学教育学部研究集録, 135(1), 71-75, 2007.
6) 文部科学省,子どもの体力向上のための総合的な方策について(答申), 2002.
7) 早川健太郎, 運動経験と幼児期の遊びから考える運動遊び指導の一考察, 名古屋経営短期大学紀要, 62, 57-63, 2021.
8) 日比健人, 保育者志望学生の運動有能感と運動指導への自信や意識・主観的健康度との関連性について. 夙川学院短期大学研究紀要, 46, 37-48, 2019.
9) 鬼澤陽子・安原志帆・内藤年伸, 小学校の体育授業の充実を目指した基礎的研究-群馬県における低学年の体育授業の実態調査を通して-, 群馬大学教育学部紀要.芸術・技術・体育・生活科学編, 52, 71-86, 2017.
10) 宮尾夏姫・三木ひろみ, 小学校教師の体育授業実践に対する支援の検討-実践状況と指導上の困難さに着目して-, びわこ成蹊スポーツ大学紀要, 12, 37-47, 2015.
11) 木原成一郎・松田泰定, 教育実習生の体育科指導における心配に関する調査研究, 学校教育実践学研究, 8, 1-8, 2002.
12) 嘉数健悟・岩田昌太郎・木原成一郎・徳永隆治・林俊雄・大後戸一樹・久保研二・村井潤・加登本仁, 中学校保健体育教師の体育授業の力量形成に関する研究-教職歴の差異による悩みに着目して-沖縄大学人文学部紀要, 17, 39-48, 2015.
13) ベネッセ教育総合研究所, 第 3 回幼児教育・保育についての基本調査, 2019.
14) 吉田伊津美・杉原隆・森司郎, 幼稚園における健康・体力づくりの意識と運動指導の実態, 東京学芸大学紀要.総合教育学系, 58, 75-80, 2007.
15) 桐川敦子・中道直子・内山有子, 幼稚園における運動遊び指導の課題-幼稚園教諭及び幼児体育指導者による運動指導実態調査から-, 子ども学, 12, 53-56, 2016.
16) 伊藤宏支・岡崎善治, 岐阜県内の私立幼稚園における英語活動の実態と保育者の関わり方に関する研究, 中京学院大学短期大学部研究紀要, 49(1), 19-25, 2019.
17) 秀真一郎・木本有香・中島眞吾・烏田直哉・小野克志・志濃原亜美・横井一之・田中卓也, 幼児教育現場における英語活動の実態とその方向性,吉備国際大学研究紀要.人文・社会学系, 23, 21-28, 2013.
18) 内閣府子ども・子育て本部,「令和 3 年教育・保育施設等における事故報告集計」の公表について, 2022.
19) 中道圭人, 幼児・児童の学校管理下での事故リスク：幼稚園・保育所・小学校での子どもの負傷・疾病・障害の発生率, 静岡大学教育実践総合センター紀要, 27, 22-31, 2018.
20) 加登本仁・松田泰定・木原成一郎・岩田昌太郎・徳永隆治・林俊雄・村井潤・嘉数健悟, 体育授業の悩み事に関する調査研究(その 1)-教職経験に伴う悩み事の差異を中心として-, 学校教育実践学研究, 16, 85-93, 2010.
21) 厚生労働省, 多様なニーズを抱えた保護者・子どもへの支援, 2021.
22) 吉田伊津美・岩崎洋子, 園での運動遊び指導と運動遊び指導に対する幼稚園教諭の認識-園での運動遊び指導に対する満足度と技術, 発育発達研究, 64, 18-24, 2014.
23) 杉原隆・吉田伊津美・森司郎, 幼児の運動能力と運動指導ならびに性格との関係, 体育の科学, 60(5), 341-347, 2010.
24) 大矢隆二・新保淳, 投運動学習における教師の指導実態に関する研究：小学校教師に対する質問紙調査をもとに, 教科開発学論集, 4, 135-142, 2016.